

「唐船」の背景

——応永の外寇など——

山 中 玲 子

中世において、九州から瀬戸内にかけて勢力を持っていた漁民集団は、大陸や朝鮮を相手にしばしば略奪行為を行ない、倭寇と呼ばれて恐れられた。「唐船」成立の背景にこの倭寇の活動があることは夙に知られている。例えば香西精氏は、

…永享六年六月に来朝した明の使節が、將軍義教に申入れた三か条の中には

一、賊船ニ取ラルル唐人ドモ、都鄙ニ散在セルカ。召シ集メラレ、悉ク帰唐セラレベクハ、畏レ入ルベシ(満濟准后日記、六月十七日)

などというのがあるが、「朝鮮や明の捕虜が」方々に抑留されていたことが知られる。

と指摘されている(『橘香』S 40年10月)。確かに倭寇の活動やその戦利品としての捕虜の存在が、この能の背景の一つではあるだろう。が、ワキの「さても一とせもろこしと船のあらそひあつて……はや十三カ年になり候」(能楽研究所蔵・伊達家旧蔵堀池語本に

扱ふ)という科白は、一方的に繰り返される略奪ではなく、記憶に残るような、一回限りの戦いが、背景に在ったことを匂わせている。そこで当時の記録類を捜してみると、応永二十六年の「応永の外寇」が浮かびあがってくるのである。これは、倭寇に悩まされ続けた李氏朝鮮が、同年六月、倭寇の根拠地である対馬を襲ってきたものだが、『満濟准后日記』同年八月七日条には、この戦の模様について九州から將軍に宛てた注進の内容が記されているので、返点を付して以下に掲げる。

其状云々、蒙古ノ舟先陣五百余艘、押寄、対馬、津。小式代宗右衛門以下七百余騎馳向。度々合戦。六月廿六日終日相戦。異国ノ者共悉ク打負。於当座大略打死、或、召取云々。異国ノ大将両人生取。種々白状在之云々。此五百余艘ハ悉ク高麗国ノ者也云々。唐船二万余艘、六月六日可令着日本地ニ處、伴日大風起。唐船悉ク帰。過半ハ没海ニ由、注進在之旨、彼ノ生取ノ大将高麗白状ノ由、同注進之。

この戦の間には、石清水八幡、出雲大社、賀茂、熱田、北野等々、あちこちで怪異が起き「異国調伏御祈」も行なわれたようである（『満濟准后日記』等）。元寇の恐怖の記憶が消えていかなかったためか、朝鮮だけでなく明の来襲の噂も広まり、世情は騒然としたらしい。政治の中心近くにいた満濟の日記だけでなく、『看聞日記』にも、九州からの注進が詳しく記されていることも、人々の関心の強さを示しているよう。倭寇の活動がいくらか活発でも、それは京の人々には殆ど関係がない。しかし、そういう人々にとっても、応永のこの事件はかなり身近で重大なできごとだったと思われる。とすれば、ワキの語る十三年前の「船のあらそひ」が、この時のことを念頭においている可能性も十分あるだろう。

もちろん、「唐船」の成立時期が応永二十六年よりも前だったり、逆に、曲名初出の『能本作者注文』（大永四年）の時代まで降ってしまったりすれば、この推定は成り立ち得ない。が、成立の下限について言えば、『能本卅五番目録』（世阿弥から禪竹へ相伝した能本の目録）所載の「ウシヒキ」が、シテと子方二人の牛をひく場面の一つの見せ場とする「唐船」の別名であろうという通説に^{注1}従って、この曲が応永末年から永享初年頃に既に存在していた、と考えることに問題は

ないだろう。一方、上限について考えるには、作品の構成や趣向などが参考になる。先ず、シテと子方登場の段における物狂能との類似があげられる。掛ヶ合・一セイ・（名ノリザシ）・（サシ）下げ哥・上げ哥という小段構成は物狂能の定型とほぼ同じであり、続く、下げ哥・ロンギの部分が発場の段の後半と仕事の段を兼ねる形は「木賊」と共通する。これらのことは、「唐船」が、物狂能の定型成立以後の作品であることを思わせるのである。さらに、対面Ⅱハッピーエンドにはさせないようなワキの役割設定や、そのために一度詠嘆の場があった後、急転直下、事態が好転し、シテが喜びの舞を舞う、という筋書が、「盛久」「春栄」等の、△男舞Vを舞う能と共通していることも注目に値する。「春栄」や「盛久」の、処刑確定から赦免へという劇的転換に比べ、「唐船」のワキが子供だけ日本に留めようとするのは単なる気まぐれのようにも思え、シテの運命を操るには重みが足りないようにも見えるが、『塵芥集』など戦国国家法を見ると、中世の社会では下人の子は自動的にその親の主人に帰属するという大前提のあったことが知られ、「唐船」においても、ワキの態度は、シテの詠嘆や急転しての喜びの舞を導く物として十分機能していると言える。「盛久」や「春栄」のような能で成功した趣

向を利用し、普通なら△男舞▽が舞われるべき所で、唐人のシテに△楽▽を舞わせるという工夫が、「唐船」の眼目の一つだったのだろう。このように、物狂能や△男舞▽物で完成した形を採り入れている「唐船」の成立を、応永二十六年以前と考えるのは明らかに無理だろう。西野春雄氏の言われる元雅作の可能性も含め、ポスト世阿弥時代の能として考える方が妥当と思われる。とすればやはり、「唐船」という能の背景として、応永の外寇は無視できないのではないだろうか。

応永二十六年の十三年後は、ちょうど明との国交を再開した永享四年に当たるので、想像をたくましくすれば、「唐船」の初演は永享四年で、十三年ぶりの遣明船派遣に合わせて作られた、などということもあるかもしれないが、十三年という年数は「十三回忌」からの連想から出たものかもしれないし、その辺のことは何とも言えない。ただ、応永二十六年の「船のあらそひ」が人々の間でしっかり記憶されており、「唐船」がその点を意識しつつ作られた、という可能性は、かなり強いように思われる。

(東京大学大学院生)

* 注1 西野春雄氏「ウシヒキの能」(鏡仙208)・味方健氏・作品研究「唐船」

(観世S53年3月)

* 注2 西野春雄氏前掲論文。